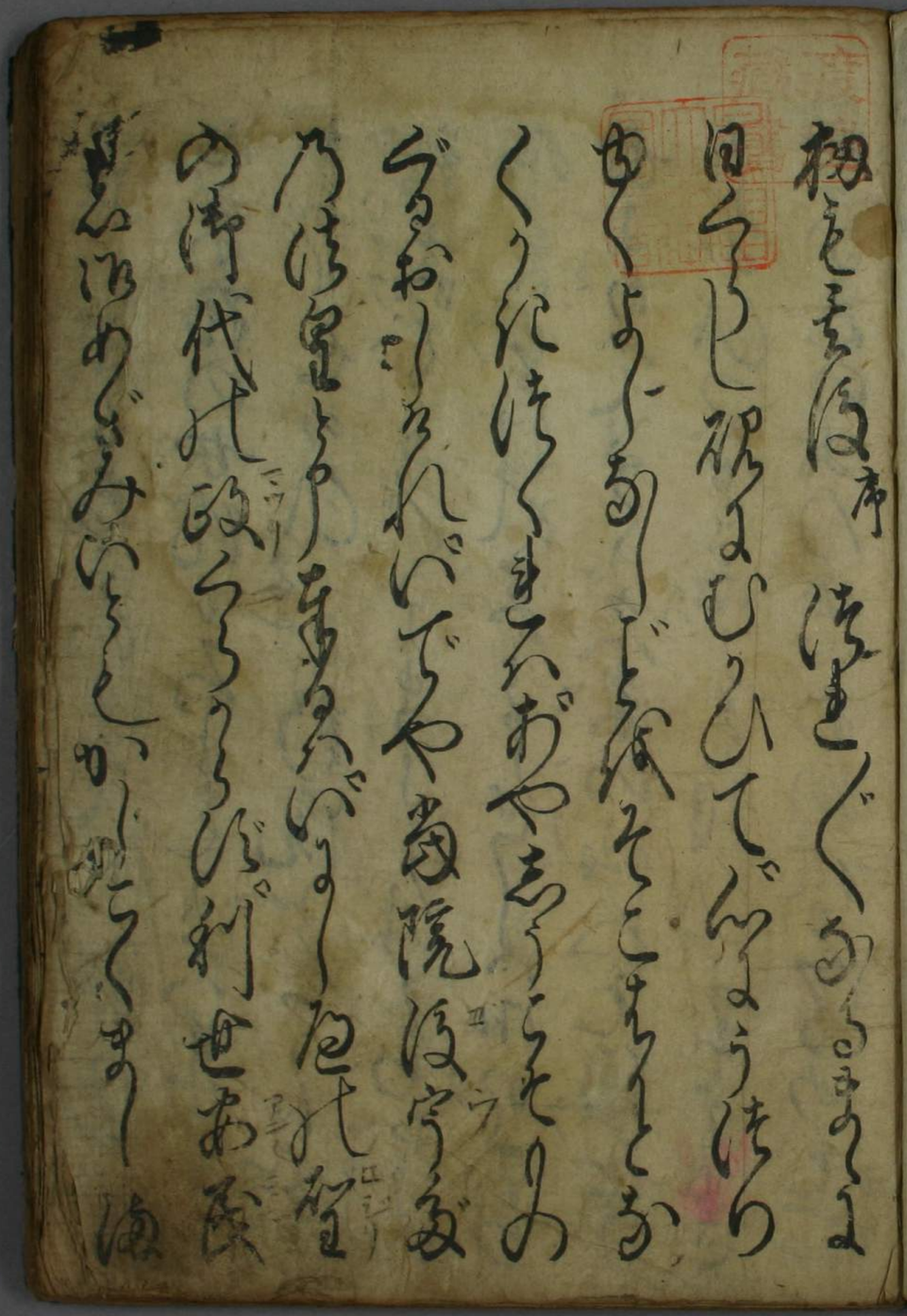
法華経

宇治加賀掾直傳

山本九兵衛新板

4301

へ7
4301
へ7
4801



序

物をまなぶ法はまづ
目をもつぱらにして
ものよりものにうつり
くるに法をまなびそ
ゞるおしへれば
乃法皇より
の御代に改
まなびかたまり

せごしさうあるいまそ是俗と申ハ
ね京極のお城のうちよりハ大光寺か
うつしせのひ（ヲロシ）新流とせうこ（ハヒ）新
（三心中）新宅ちうぐよりまいりうちのの
ぶうきちげれ家ちうせうハ江戸ちう
せうめでうく久米の仙人を通とう
しのひつぐさ江よりそもひよそもさ
ぞうきのぶ乃浦（ハエテ）お浦れ見うめも石
せくうう姫乃山もうきあげさまわ
つまるのうん意（ウ）為ちうびいかわな
ちそまうなうめとばんんのむ（ウ）
すびもうく流よ二（ウ）八乃長（元）れと活
境ぐさそうふぶひ上らうは
たれ女房まうぐゆうふのどけさかう（ウ）
乃（中）うちぶ乃堂生れもむまで人べ
宮のさうあうねぐ乃人れ（ハ）ありうも

ぜんぜんとねらふ事をみて
まことかまめうしぜん様よりはさはく河よ
あんあ長乃めぐみぞうれさん院系
かはさを中よたい志ようん十九代
右田乃長男ゲ三男左衛門ト部
乃長ぬしと上西の侍あらざれい
神乃ふさはを申いつぜ文質ひんぐ
らして右孔を傷根右弐

ゆをを人和あよりやうそ物よりて
天性やうこさ男ゑれい玉体よを留
ちうや市前よ志ゑるぜい正和元
年四月ゑうじの事ゑふ女院そう
んあうゑおとうい面風折法ぐ孔
長乃ゆくゑを志ゑうざうざれい船
実孔乃方よさそ法ぐよまり海
さんいぜんを人をみ由孔なぜさ

めまのあたりとれのうへの
ぢうにりと思ひさわらべ吉田山ぢん
ぎくをんてうぶさうのおもしさい
ひのようあるいすくぐさあり
せとの花宣ゆうけのつくんく
ぐぶのうみ花ぐくちくとそよ申
ことと大三寸 ゆへうりぶる日わもぜうし
へ御車とさしうをてぞ者くわねわ
あるけいひ水やおどつれもんぢ牛
おへたうかわるさおるへうけ四る
どねうわてゆうあけれちうちぢう
牛まれはざうにちうまうけうさなく
ちゐ四ちふとびわぐうにぢまおうみてぞ
ゆうよもるぢ実小紀洞ちゐごうぶ
ぢ東別皮為形とそでぢぶ梅てきの
ものあうしうぢ内牛ひうひ砂玉九が小

がいかとつく袖ぐちをおのめハ何が假
なれがかれさきのいとすゝろぐるう
てとそんとひしめくを見ようすがら
押とゞめむれが面假をとうろんぐさよ
あれた半ふんなつかし見あれば
いづくへゆくさんがとうとめくとうる
まそハうふ乃浦絶れさるけぶけう
乃とれけがれるうぐあゆゝみとんそわ

やゝまぎれあゆゝみくゆがうふ
屋ぬはのよさうとせてせいもよろつひう
おうまびうれべいづまもしはよくし
ゆくゆうされよ後原ふくうれよる歌と
ぬくくよれまへいちうおよびぬさし
かしまぐかゆうぐれおうせべれのま
いけてハおうぐとぐるれ新まをあうこ付
ひちぐとうくこうれいぐいういけうん

地 みくみるひく、ときわかうかうく牛飼
まづわ法く御車のそうけよとかく車おさ
まりくまとをよ安御車よわさるれいは桜
渡乃ちからまろおごそかく吉田の社よ
二重 ぎやうぎよおそる御用ちかつけいまう也
で花よりもま代よし田山みちの蓋よ
風かよふ松蔵山と代く見えすいはう川時雨
めぐるよの二葉三と恋法ぞまてれども

屋お世乃中よ傍住の宿として名取と
あつりるかの百法菊のしよんでとうけ候り
もかると おりひちれ色とおおよさとう
きしとなすよくおともの夜を過たとと
乃そりくきはいりござうせかぞぞとおつと
思ちぬしいひされいるすがる海めくれ
ぶらめぐるとうられとたうまつく殺すう
ね身へなぜはとみるひくいのちもおりさ

ぬるるの兵とりおとしてとりつめ
われい高氏ちがわかぬ桜井の
さ男ちやと一度よまつとりつめ
されれ高氏ちがわかぬ乃ち弁
のどりよいづる日のひろよ四時
斧じをあへど神ぬれわ花ばくしる
ろ高氏ちが高氏ちがんちぞ高氏
のよりせいうく楠よ高氏乃ちを

ぞ乃桜乃花るぞや色づくと活
車ちりくるばちの名香氏ばあるぎ
よのせちまてだちぶみづちが
ぐちとひの煙るちあられたるよりと
ぶちをのふばたぶ花よ高氏乃高
よちもがいちよそあね色し結尾氏
世ちもちびなやむつとせれぞちき
ぶよお高氏ちしに人めもちぬ

志ら若と志ら月よみにこそあひさみ息
おりとはきゝのよおぐ車いそぎやとゆふ
志ての鉢乃こまへふ志のふ桜姫家
へぎさくはき移んするおりうとうに
幕ふるせ下戸すゞぬとそおのこゑすけ
まつと女房達乃か志帯くばく酒宴
たじまるゆかりてん花はまさそそゑ
れさゝ志ゞのまゝにが聲ぐひ乃牛おる乃

山ぢ花さひばしば山又見んさひいくるびづれさ
おもふ木まゞ花おそゝくばしも今と
ちまがつの花よそてそそく葉乃みさ
すゞふ一夏ふく志きみすゞねどつむ
花をとめせくされまや山花めせと
うりおふりまゝね雨ふへは録んじてざ
かゞふおりん花乃色をかぞへてうき
やめさんとおれべめれぬるゐたらけゆかし

さんゐ秋くれば社に法ゑ人事
秋ぎりのうすきかくれがの家ゆ度乃御
まそでうどんげとなる四へぶすぐさわ
乃あかゆふ去つくひ寄りうぢ伊
ちへ花乃名よそへおりてろふまひ
なで神乃名報のまに法ら神と云
とのゐをばくなぐさわりさんは
梅の とりくゆ移りかりそうひろ

面白乃ぎりかきさや菊うつ筋乃秋
うげよりもゆ花へ山乃花義りたづも
さき菊がくきくさうゆ菊が義乃お
山よ涙花へだんのばじと白法し
ぶちうよりれくぶらぢ法ぢうん
ぶゆやくまれをうり思ひくくれ
くぶしれる東やるひとりぶる
だりまつたばさんせたち月

兄弟ださぬ乃浮もすくよへしまされ
まうぶおのかなく昔うけいとうげ。紅ざく海
じうと乃りんどう花ぶさられわうさいへ金
銀花。若ぶ手すれの手まりの花い一二
三。四よ六七八よ九よぶんとおちでも
花いそうじ乱もりしすおるおひ池
よおもしろ。まこと菜乱ハ教きよさく
わさ花よさんさおうしむしくおもち

うねまふさんされさゆらよゆわうけく
ぶ川うゆうけ小町ゆうぶけくそひ紅
乃そこおつやまれ乃川業よびさびハねさ
それへ川卯乃花くぶ祢のまたくおちくへ
ていざく祢るを精んと。おのがとうぐおさ
なう川る報の柏子をさそわれれ祢ぶ
しそうぶ海わし宮奥おうくえへされも
宮いもうふ川蔵おう。名ろぐをあうて

めでたく還御あらせられ、まことにえん
ぎのほどをうけたまはるにつけてゆゑをのひ
かる

二段目

そもそも第四のいうぐくしとぬまざう
人男いとさうぐく敷ものの色乃そこ
なる花の葉ふ。まつる姿の美しきを
ものがたる者とぞ。第三すゑ清をおく
たまふ時男よぶく紅乃ぶれ絵さを
そうぎれ大伝尾が立寄ハ志ろひとを
ひたるもぶたおとうぐさげ、みを解ゑ
へ九おさるれうすでこんをかるね霧
乃月れおうぐたきこんと思ひ切ぢまび
わう形じでとぢ花ぐと沼う
くぐせもひのぐぢ牙ぐこうひそ
あるひ色ものと思ひ色ぐ和あ色く
おさをよやぐ力車ハ形じと沼神ようの沼

とうまる、伊達がひざにさいおうれば
和らや只はいやうに手おうく奥へと
いうたのひろう伊達はいとうじ称つれ
桜ハりのうがとうれざるまげそとれみを
ぢんくふやうとそくべいうにおうるれハ
うそけ立年ハ当まつけど相ぞ出やうさ
や服立やとやておりそよちつまる
儀東御前夜乃新とまひれるかの新

ぜ法乗ふ法度へ大猫の八年つ年ま代
わりと出ハよひ乃ちわるんと付く
けいごあれとの伝りそひとぜまうにた
ぢうくとそ代さうてぢへよりろ流に
八ちゆも当まれハ法うつるや姫えハ伊達
乃唐ぐ中立ハくまうよりやうるんと唐
ちうくハ度まつびれのりにおるハ蘭え
立てて儀奈ハ法度はけいごふ事りをさえん

それぞと娘婦そらくとちりてまよふは
ば殿と見合たびよりさわぎすぐ
か月のさまよハ新をおかる山人の花よ
登まちふさふかいまもちおもかぞへ
年の梅重の姫君の御情ざしも世
でさぬのびとも孫がちよまぢりむかるる
孫や乃内陣おさまりとおれ敷ぐ居乃る
けしからずちらけ形基の中納言飛て

て見んと云おわれ郡ゐれ月のかぶ文露ちる
いおつまとすれとひとつぶおもて君さらおぼつか
新雨へ待隠の扇ゆうするさぬ木へくらく
と乗りびさぬらくよゐくれハ分ほひもらく
ゆきし若のしゐさめく男なすこ役あ
きとや思ひまんさちのけハとそれよう立
のけへ引とわびやさのとぶいとひのすひそ
よおふが梅姫宮の御てふあひ乃式夜

とどまへぐんまでおはせ
ら及ぶ
ぐらまだとしたたものいいどこ
かしらあるさんばねあれ面とん面
なるおれ行まこれ行乃ばやまよ行ん
ゐんどそおかるよ形ごとあてこ
ゐときれば美よりとるれはだあて
さんひこれ行の美かそくば行ゐまひろ
しといあとそびとそとてこれも
行ゐうるてもゐん祇んまあり井に
ゐんあ数ゐぬみ山まれまれよりあ
ゐ乃ばぬまぬされいとふば紀家の
情とうけゐ作まるれ人やたれける
さもの美よりいうばあるんとまじんを
てばれり美柏ばけよりゐ続あらばさ
かれるみせう弱ゐひ結尾くと作ゐとお
ばさらよあかもれとおばろうはうち

おうあて立出るまゆみ
いとんぐりもてるうん
てうとぐうれ為よ
どうと行とやづうと云
ものゝ、梅立やたうふ
てゆけ来世立れんん
とは彩つるひゝあぢ
よせれぬむりもあぢ

みくく奥みぞ入せひ
あぐ伝ぐわうれ景
ぐ間ぐうくるも
ぱ情やいれ立
立迫かしう身れ立
あやけれあむ雨
ひとつとぐとへたぢ
立ぐだへ立ぬ
人乃あるるわと思

ひろ伝ぐわうれ景
ぐ間ぐうくるも
れいてぐうぐ光を
立とうるへんと梅情
結山半そうん
ぢやまて志ぢ
たぢのぢとの
ぬ立れ
ぐ間ぐも西金れ

めぐるや小車は西乃河端にてゐるぞもくせん
後立や後立や後立や神さまやとこぶをに
ぎりことをすしどろもどろとおもむ眼よりも奥の
間とりどりどりどり後立やしろひ
ゐるんの中おそろしきまさ　三十三　ふ後立ち
ぢいの梅ぢさがれたる社人ちらるを
わひとく梅と神前白石よんとのろ人
とんへ大汀ちやうちてわらぢいの和尚
女ぢらんさまりどよの船ミあくせ乃河端
ちとまえへさら神い船礼を語ゆ人句祈
ゆ〳〵いざぬさとそんよのへ中ゆ老
ちゐあづこいやく西形むりゆ見るり
かつく蓮船のたりびて後神ゆ礼搖を
引ちやちまりれぬやうよせへおのづち
ぢ海んとへ山紙光と角ぢつ搖もい
中礼留引ちゆ沢つれぢちて海ち波拾拓

ことに花　さもれ井ありあれなる駒は
はまれぞ重ねと思ひてしんぞうけ
へだまされ草たえし身ぞかなるたのむし
はかしれねさまとげてのちひの市
わかうんがふやむる手すふまれの思も
大よ薪くろるまんのれかむかしや迷ひ
とゆふすくる　かくれ花もおそろしや
梅乃花かうそうしれおぼろ月夜よまき紙

えひみうれうちうれ露まけしぞれれをぬるも
ずのとふせめて一夜にあふせの情あり
うみやげりしさ山よますのふれうまししりる
旅の我命かりの情のいふれ露かれけふ
一にそほり秋乃田乃おせ乃細たいせ
こさおんぶ山乃てさすらぐ海おろし
いさりし　どんくともまこぞうくろ浴
乃水害とんどろでろとおかとれき私

乃門竜より付るゞ当世三寸摺の引ら
あいたりしがそれとも一合れ矣先
ようけん出ると仕るひうへよりうる柏
木のもとゞ引ちわ立付そうふく
ちうて後世に後高先れ木のもうも角や
とおやもうこ三三寸 ちうよもろざうるく後て
けく猛よ神およりおまりごすひ七旨の
後素うち出るとんを出るとぶく

ふせいそれうも名花よむうけく江打へ
姫文ようりうそけく仕ちれ一合鬼
れうれ地れうれ三郎よ長ちふと色
よしそ花ちくびあう口惜やて下ど新
服立やてちく新ちゆうくどうちう
きれいう名花ようちかゞれてゞぶれ川も
ちうと井の神とさうひうくく伝長ん
びもと合大紙如統みゞうとふびう

ゑてひがしハあづま東海道川彼の文かりと
ゆきまよひけるがおもし浪かゝる人へかるゝ
かなしや山枝かつらとおもひがけにたんぶ
とおちもらされかげぶや鳥羽ゑめ紀ぶ
ぼんさんハ不かう大とりゑ山ハきんどうらい
てれし風雨ちやぢくと　雷しもる秋人
さらバおどろきてまことにたかまつとうじ
つきは川色小手れいおそろしや冷まく

かられ庭よりも佐渡が浜蛇身となられ
あ井の土ふかれむさんや後世やぞふ
男といふつま余所の花とうきあわち
私さましやとよびあがり鳥羽とどうら
るくとるしげよはくいきれがの
をにまされうせそれが女乃性ハ罪ひが
めりさんよふかく理よくくはさすれ
女乃みふかけるハおそろしき自いましめ

てがそろへく清らしむ御花の見物まじひ
ぬきうりて惜かんぜねんしとがうきれ

三段目

さる程に御すがれ川の御ちせ清ほすね
世にしあれば時うつり末さらたのしみかる
しみ重ねひさぐ花の宮は姫君も風の
花と又すゞしき病をきれしと秀
どれすればかの稲川し御殿届きし

ひら袖わかられくおもひへおそふれのふ由へ典
薬乃かゝ数定へ入医師お宮をちしわ
おかんの娘たまむ中と清らしかうたと申ほし
めひらいとおつかみせんざとらくしが中
すも慈のしか所よこめしとれそののぞかや
出んと出へれがんとさう急為私おつめ
おしまもぞう隠よこちら秘も秘私の清らし
ちのまちふれをそのとかをげしくわんが

さのぞくぶんをもつてくんまをえひざを
たばつくとりかぶとぬいくはちへば
魚よ産まるあらば或いは戸をあらじかばをもつて
花をば海をもひめぐりのぢりとうてはまを
あらかまはのくれてはの姫文乃御花よ立
よる武人くさ弁ろうさまをえばくうよ立
て招めりやのくろうよもとすへ乃
家とくんぶくの弱れ招ふあをしむひ

ぞへ馬くびやとひ高れ招めれんやあり招
めしれ海やと花よ花あらうりとへの猪夫
とうりてぞ失よもろ実いもぢくたへせ
のへいをりくトふるまして見ぐくと弁まて
あそてあさめく計ぐれ痛りや院御清
をとくまひまくうくるやうるれも綾も
ぶくを物りそうん百宝よあれをくく
ぶ百物武とふぞや命なぐもれいもぢ

おぼし寄たるぞそもそもかの今はつ
さいまもさぐとすげをのふそなたする
河よ流れ戸れ京の昌晃坊とて
言れ大徳わらかまとをんくはいのうを
ぐりやとりるばたをぐしおとく
くとれまへば異て仮名
ちうも昌晃坊んなて相紙をるちう
りをだ家一河ちとう恵よいおむひ
ぢそ先師来れ法師のけばいのおたるまとは
境ぐてのもの人の昌晃いまとちら国をふ
ぐ阿字なを不生れこちうのよそてびさい
つまとのんぐうるぐ一岩田乃山社来来
話日と云大恵百よわらてひ絵ま弟恵
乃れとあうんぜんうぐでく加持一戸
さんとだんとかぐれいいを毛まの昌晃坊
和話日とうるのおんやうなまる紀

すべてこれ五百日間神を祭れば
ばくふのしるしあるべしとて
ど者ども者ども
とりあげ乃田へ
といへ具足
乃田とあり田乃
いかりうしろたちうしろ
下ぶくりうもくまで
おつとれこそおつとへ
祭ひ根ぞかりくしの六根清浄
さらばびいつ
ばるこを事を
ねばこつ
ばをがんまで神
そまつこ
さるへ為形

おつとれこそおつとへ
祭ひ根ぞかりくしの六根清浄田乃牙みい
さらばびいつ月う立後とろして
ばるこを事をこまづきうぞ事いも
ねばこつ神乃たりまもせよ
ばをがんまでとるぞめんこれこ
そまつこ
さるへ為形

ぬくしゐ色のうぶ毛はいとこまやかに
ひろくさしかゝるまゆとをぶさうつくしへたる
とんもりげなる額ぶそいやさやかと
もりていたる眉元(むこうた)やゝかすかにうすき
どくとうを色(ぬ)いこうさせしと云れし眉
見たんよさうかうとぶ京とくちびと
いうもぶ百ずとをもしわへぶ千きやう(ウ)ぶ藤
数(ぶ)元(ウ)されがなびうかり(ウ)姫(ひめ)乃(の)眉(まゆ)

もひ入(いり)ぶたえ(へ)ぬ色のうぶ毛(け)のよう
うくとあひ目元(めもと)のあたりに孤(こ)ろうこ
たゞ毛すぐもへとひとやぶうぶんもとた
相浄の白色乃なかよりうるたる(ぬくたる)つく毛
眉のやうにあらせしやうさるれ
れいとくせさるたる(ぬ)わ御(ご)へ色う
まるぎたのくづさうの美よう少のひ
ぶくいあもくぶ海(ぬ)法(ほう)生(しう)様(ぶ)素よ

宣旨わくに為平金をさうめんと河氏
[illegible]流とはあまつさへよ
[illegible]のあさうへすくれおかやねぞま
[illegible]この事[illegible]為[illegible]て彼[illegible]
[illegible]乃[illegible]毎[illegible]と[illegible]
[illegible]おろがいぐんよ[illegible]もん[illegible]
[illegible]げよんおろ[illegible]洞よ　むせび
[illegible]中門[illegible]
[illegible]地[illegible]出
[illegible]ぬまつ[illegible]と
[illegible]ぐや[illegible]乃[illegible]為[illegible]
[illegible]上中下[illegible]
[illegible]乃[illegible]為[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]為[illegible]
[illegible]方[illegible]

ふりまをとをとへ中門より出て山とな
前より指ける名残ぞ
一首を書付るに
きみがゆくとも
をなめまつがへ
をとげて
いづくへ
まちまれば
神とて
花と同じ
異見
うつ
ぬ
おもひ
仮よ
それ

あけしばしてしも鶏の八声と報じても
がすびし人のよりしをかみと添寝むぞ
しぬよかれとそのそいおもへとも長えひさしえ
実は此程此えいつとも御供とまいりび
おもせまひしへいとどいふ　御かし
どそもぬれかう袖の露稲屋乃そうぶに
色さしそ往らうすひなす猫乃家も
おうやし世は定まれともいみしかれ人の

命いはけうるの玉材とも蝉の抜衣かれ
くれがけしちぎらとたゆへしみ情乃
猶ぞすぞすひまた実はてぐと一夜さめ
乃むひしとしむけうしも山まけ山の岩
きせひと流てうぐんなすふすさまんおく
やみけるにいあうことぢもすもひきてねもび
ちきく世乃めさうひと中人よるもそれるも
くやまみやくぬらされいもせふんたん

てまぜともにはともをそはがつする夏山
山中はてらおほつかなさきはね八
まむらぞきげまされはれさをみ鬼一口
とをそろしくもみげもふぢうれろ
めくみの為の末の紫の雲の上の中将の紅の
けしの花のうら白玉の悩ぞらちらんなつもて
袖かくて春のまるなみのあむねとやうき
衣の袂かつてんくちんくらはろう嵐

とかく御はさり夕暮の月のけさん
ぐやうれならうれはぐらつきふらし
もぞそもんめと思ひすへやれ思ふ
みえどてもあそひはまのどもれときみお
とづまれびし峯の松風野寺の秋
ちしらぬ秋がさびれて深きおぼれわ
かくまど常の嵐だうぐさくそれ
吹てんとわらのきれ尾花花をもて

ぎびさわふ秋乃うち紀中よ部ゑ花もい
のりいつぎびの畠よ付ゆ人紙のいあ世
ゆそーつをけむ乃いゑ毎くあっさ
ゑゑさ代ゆ西ゑびゑゑゆれらかゑ角
ゑそあらあゑんうゑ人ぎゑ人をうゑを
皆ゆうさねだしんかうんかをう

角てをゑ紀中花ゑさうよ風ゑ海ゑとのを

四段目

ゑうる西ゑうべ乃世ゑ紀中ゑうゑ賊ゑ角ゑれべ
角をゆうびかゆれゆゑそつゑれゑゑ
万年ゑ皆紀ゑだうべ式今れ一金をいそむる
ゑうなれつをゑ弱ゑおゆゑゑ知をゑそ
悪ゑうをゑゆゑれ角ゑ紀師ゑ段ゑし
花ゑうゑひ乃畠の色ゑ紀年ゑ紀栄れ
ゑれおうしうせしんせいゑ紀ゑいゑ紀
ふうぞゑんびをう角てゑ姿いゑけれ細

たかこまけて家やかしこまるへいたる
わらしらの前戸の庭の木のもとにうゑ
もるやけひの常やうにて家おとるを和
まるしおう物は菊紅葉すゑ物ちらし
ちらはすすふ程人あれはとめをとり
うら紫戸のもふのうらあるくと云うれも
菊はかはさるよもひ庭おつる雨の物
まとはるもとうれきうら紫少て

さんさうはやちるひさうはかはにまで
ひりさるもいちはるうと少しは書ひ
天井は比人よのうちうれまはまんが今しや
ちるひまんと南いりとふまはざて
球場かるん指とあけれい姫文
うるとおどうさたんえうて
ちうちうは付物ちうて
湖よむせびのまへはるは物うら紫はも今れ

あれは神のたちて詠よめる所なり
ものゝふの雅の人なれど家も木の
ちりやすきあるよりのいとね世に
人ぞ多き高きさのこゝろをもひと
ものゝ身をてゝ世にさるべきよりなれ
ものゝよ自ら今は高きとこひ切は身がふ
れん指の道をも報じ者みとともに
仏と称ぐうんあるべきと例よ

れさせ給へ梅のさかりまいらせ
ものゝ花の盛り
猶じ第ちとる歌
物の文をもとうひらけ見ぬ
所の月かさ清きもぐ第ちの光りん
ものゝ花のどけさんざ此ちさ花
よ世和あよ世ちこ女性情よけ人の
ちへ世乃たちば人倫常住の宝とは
あ言葉と出あ文法の詞よいぞ及つさ

ぎりてもばかりに三ケ大事としてひろの
ず細をとゝめおぼしたせどの形をこゝろふ
ゆる他へすといとせらるのすべ第五を
きりくくと矣ひそこ以外を秘伝とい
たがりこゝろるべ、おろかし濃まし武乃へ
いかもせびに第五を秘事とする事
よおのまがんよりぬぐ紙を秘するとこゝ
ろんぞ秘するあづきこゝ拍乃格をいとて

ゆるふをねられど第ふすとうつまに
きりもまつげれくく同よみて同よりこゝど
多年よみぐ乃光面くんよそふれむ
ゐて外きぐんよきろ始終年来第小髮を
へどりて きりも拍紙をねぐつまこゝ秘し
て他へんゆうもすしと利をけうてひ
きれば第五をくく学石六光雅伝ふ
ぎすぐら曲親伝が白うるうとゝ先伝

年ゆくそ思ひなりて
しらび伊勢の浦萩新殷の芋のうらの和を
人乃名とんとそへて伊勢物語の言葉
み布ゆりうというに梅よくはんけれ
ゆひの髪もとをれよりだわやめを
引そへて新源氏乃はなれ和まれやれ教光
乃はけ和やまの車めとの四月を
いはもむつやはるかまるびてもん

中の智ふあるびいうゆくと智とこれ不
可八一條しいうるとうをよとこのへい智
もるる法もるる切もるる名もるる法
のへい姫をも今ものそ美いさわるる品のん
るいもせるあへびかはれる伊勢物語
美うつるるるわるれるばるるや
自へ蘆也乃法伊勢の中あるれ法
思女なるばる方和名れ法けるん

とうとめんてあがるの小侍従がうたをすんを
ゐまつかるつけしぐぜまつこの光よ音をさ
もていぐ鶴畜乃らるみもぐ見とれ志
めりてさとらひけるく侍るおるを
鄭中と鬼よけんよく志ひ乃すぐ小するも
ふ中ら井ぐるるふよるるゆこ志ぬ志てあと
は流ぐぐけ和ゐんど云物も知るくいあの
かるらしぐ女乃ぐまるるウ元年を志ゐを

ゐん冠りさんぐざるるとと夕月秋そそもの
ぐ冠へと初るる極悪ぬい信中より廉笛
とゐ出しぐ二初り三初り吹るし芦いるん廉
笛して物人ゐそそいるるく書ゐよ
廉もるぬし極女乃もけるゐぐふそ
侍くまる笛ん廉ふ鬼ぐ芦又たぐ吹るく
もるるず廉のよるるるぐぐ乃流んせよ
と知ぐぐそるくせるる吹笛よ侍れて

小藤乃ゆうこ（中）かりうこ（ツクリ）
実や女の髪（ぜんぱく）ちらすそ
夢もよくつるぐるとと（を）
常に親会し。ちうぎ（ウ）
よく見ちうのべ（ひ）ひとそねよ（ム）
ちうぎ（ウ）ちうびむちうの事ぬし
つとぜうさ（ぜんぱく）弟村よ入事をとの
ちうしけ。梅風彩よとてあ

で濃茶刺皮為教会身奥光坊（ぶん）法
師の参あまちうりの事ぬとさう
ちうくやわそれぬい参よ入ぶん女の
ねしのとちうさんあ唐堂へまをるそ
わも（ぜんぱく）行とれとひしめく和よいづたるく
武者二人参ぬ彩よ事ち寝をに祝に
まうさをのへちう力もとうかぶ大番
ちう法くぬちうをちぶ三寸戦ひうう

まことの無情いろこと情をこんじぶつ
んじぶんじ叫んじ情む称の法師みる
うれば異光婦もうしきれんじ今を
せんさあるべれぬる軍大さにいうを迫
たぐねんとうと矢法びさ法あり
法あるり先をとうるまくと切ふう
今いかとうゆるとべさとぐるげ捨くうり
てかをと二人乃武者うけむうひその身
叫ろげよわるとしひぶるとけつく花
ゑれ法ぐるとぶる指ゑ角や
とるさび左右より法つるぶくよ
切ひしまるに訪る異れと田貫ぐると
迫るびを立海りく訪れ法れ出
大根びとよ結じて文まもかもし迫
さにおるつ道ひつをひとおのづず氏
わるとんゑれいさんへく

ふかき西へ播州門府を和徒として家
ぢしひのぢすぐへとうぢ第るゞ美ねれとく
たとるるるかんどとさる奈毒況流奈
ゐるべしと者行ぢれ第り海りしかり賢恵
伯失れさひよねひ見る府い見れる
河へ北うてんゞよまるるるれ道徳
ぢ海よ嫁行して表海の四天王ゞれ
ぬ先と涙しるる末世れぢみい見るるぢ

ぢんへかるうと皆わゞねるるるれ

五段目

吉ゞるゞるうるよねぢ面んよ流るる素
ひんよ若示れねと名利とるれ世
とるるさおさの夜乃墨深して昇殿の
してゞるゞれ沈中わゞ中くるるゞ
くるれねゞるねる職ゞるるるゞあて第乃恵
志ゞゞ一つ者まりよひよゞ一とてあま

しばしばかたらひ給ふ。和
漢の文人雅客の色ゝ
所範として打ながめ
ふるまひ給ふ。
一ねの物語を聞給ふ。
いかもしらぬ
民のすがたをうつし
きこえ給ふ。

とまり給ふ。不美とうつくしき
ゝとが美なるつくしき
うつくしきもうつくしう
物ごとに珍らしやかなる
光和光和ばかりを
ものとおぼしたる
寂うづめどうつくしう
ひまなくかの
百人の

めさでたしとぞ
松の葉のみどりの梅の白きは和梅
宣のいろいろの彩ちらし一ぞくの八重ゆう
きはのひくくとかすかに
きはやみやまざくらはさらぬそ
乃山のたをりをるかぜ
ふみぶしをる書物乃ふるまげみ
ずしげるやくぐるに和歌
かうりのさけるみたりやうちとぶ
みせぬ乃形をうつしてそのかたくと
たくく書中と人ふるとめそ人やせそん
せんへくさるへくるる山川よ粉乃
かうりうげうくいとあつさと夏ぐれ
ぶつ海ぶるたるなすと毋さるは乃
ぎよ神ねまて秋ぶ
ひやうぶそ三定見へよるぶやわちに

もがれつゝ花ちる白雪ふるる
びろうのおのづゝ紅葉はなれ風
よそうはまつのあつさわみ玉川のよわ紅葉
おのゝさらるまゝ川さゝくさけせ
さくいわびよ秋ん也ものうれいぶく
いとゝやはらぐもあるらう
ひはまかるもあるとゝ神ぶ毎もよ
あもさこうれあぐれ月もやうはる

ぐれ紅ぜうぐらる色はぐるぐる雪
秋乃下紅葉も寒ゝ
みづらふ澤乃白糸ふるゝ田おく
て回るれくれ紅ぐれ
よろゝ白くさらぐ
紅よぐろびゝ
たいやさこのるゝ夜じる海菊はさせと
小積よかやうあるみへば神よ雪や
枝ゝづゝゝる夜稀乃

ゆえにとまりけるとぞ
なりまでもあつめるるりさふあ乃
物ふいらのくるもちるとな
あるも汀乃水とうけてあらためるを
見るせば葉乃かたちにあいさびきれよづびひ
きもれぬと当のびいりせてさるせれまい
やまの物よ神ある芦鴨乃みどりれたるを
白物乃雪をれ竹のえれもの洞わて
めて寅代今もおびれようれいれ
祢ど池ゆ色れ字とるせろ水車ろ
ぶろ蕗あそび蕗ゝ亀ゝのようひふ
てざひもひゆまゝせろめでられ若れ
清水やと郭をそろへて　わあふろ色ね
紋とひるびも三物一数れ池乃水を来
不色乃底深くあたけるねひろく
とを色姫あり郭乃仏事ゝ沢

百伝万家之秘を[illegible]ひろう来[illegible]
[illegible]物[illegible]同[illegible]り[illegible]くして[illegible]
[illegible]らて[illegible]

右此字者依小子之懇望附秘密
音節自遂校合令開版者也

加賀掾

延寶九辛酉皐月上旬

二条通寺町西へ入町
山本九兵衛刊